

---

# 影なき殺人事件

滝龍太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

影なき殺人事件

### 【Nコード】

N0193J

### 【作者名】

滝龍太郎

### 【あらすじ】

七十五歳の一人暮らしの老人が殺された。

現場は砂利敷道路の突き当たりの家で、家の後ろは崖になっていて、五、六メートル下は沼になっている。

犯行当日、砂利敷道路から入った者はいない。

まして、沼からの侵入は不可能である。

殺された老人は複雑な過去を持っており、恨みのある人物が老人を追っていた……。

## 第一章 ある老人の死

埼玉県大里郡寄居町。静かな田園地帯に囲まれ、町の真ん中には荒川が流れ、近くに名勝長瀬がある。かつては鉢形城という城下町で栄えていたところだが、現在は落ち着いた静かな町である。

夏になると、川遊びで子供たちの騒ぐ声が荒川の広い川幅にこだまする。

今は四月。ようやく川の水が優しくなり、草花があちこちに咲き出していた。そんな春つららかな日に、殺人事件が起きた。

現場は、東武東上線の鉢形駅から歩いて十分程度の住宅地で、一人暮らしの老人が殺された。

老人の名前は石本良一。年齢は七十五歳。第一発見者は、隣に住む囲碁仲間の倉田貫郎で、毎日のように碁を指す仲間である。

今日も、朝から石本さん宅で、碁の約束をしていた倉田さんは、玄関のチャームを鳴らしてもなかなか出て来ないのを不審に思い、縁側の窓から中を覗いてみると石本さんが仰向けに倒れているのが見えた。びっくりしてすぐ一〇番通報し、事件が発覚した。

建物の中は物取りの犯行らしく、タンスの引き出しは乱雑に開けられており、石本さんは縁側に続く六帖の和室に仰向けに倒れていた。そして首にはタオルが巻かれたままになっていた。

「あなたが第一発見者ですね」

四十くらい目の鋭い刑事が、倉田さんを掴まえて聞いた。

「そうです」

「私は寄居署の山本といいます。ちょっとこちらへ」

と言って、張ってあるロープをくぐり、石本家の庭の方へ行った。

「あなたはなぜ不審に思い、縁側の方に行って中を覗いたのですか？」

「はい、石本さんは一人暮らしでして、とても早起きなんです。いつも六時には自転車で荒川まで走ります。そして、七時過ぎには戻ってくるのですが、今日は自転車の音がしなかったからです」

「自転車の音がしなかったとは？」

「ええ、古い自転車なのでスタンドを外す時とかペダルを踏んだりすると、ギシツギシツと錆びた音が聞こえるのです。その音を聞いて、今日も元気で行ったねって女房といつも話すのですが、今朝はその音がしないのでどうしたのかなと女房と話してたところなんです」

「なるほど、それで心配で覗きに行ったのですね？」

「ええ。今日も九時から暮を約束してまして、ちょっと早いけど一段落したので八時頃に寄ってみたのです」

倉田さんは目に涙をためながら刑事の質問に答えた。

「玄関には鍵が掛かっていたということですが、石本さんは鍵の用心は良かった方ですか？」

「はい。石本さんは一人暮らしのためか、用心は良かったと思います」

「でも縁側の雨戸は開いていたわけですね？」

「ええ」

「いつも開けっぱなしですか？」

「いや、閉めていたと思います。用心深い人でしたから」

「そうですか。ところで昨日も暮をやりましたか？」

「ええ、日課ですから。朝九時頃に始めて、二局終わったのが丁度昼でした。午後は二時頃から始めて、確か四時頃に一局が終わったと思います。昨日はそれで帰りました」

「いつもどうなんですか？」

「午前中は同じですが、午後からは用があったりするので、決まっています」

「用と言いますと？」

「石本さんは会社を経営しておりまして、息子さんに継がせているのですが会長をしているので、時々出掛けて行きます」

「その会社をご存じですか？」

「ええ。板橋にある石本産業という靴を作っている会社です」

「身内の方は？」

「確か子供が三人って言うてましたけど、一度も見たことはないです」

「訪ねては来なかったと言うことですね」

「ええ」

「三人もいるのに来ないとは。冷たい人たちですね」

「そうですね。石本さんは子供たちのことはあまり話しませんでしたから、良く分かりませんが」

「そうですね。いや、ありがとうございます」

山本刑事は倉田さんに会釈をして、署に戻り、第一発見者の話をまとめた。

他の刑事も戻り、鉢形老人殺人事件捜査本部が設置された。

被害者、石本良一は三年前に妻を病気で亡くし、四十九日が終わったところで会社を長男の一郎に継がせ、本人は会長に収まった。

石本産業は靴の製造として、業界ではランクが上の方である。

板橋の工場には地続きに自宅が有り、石本さんは長男家族と一緒に暮らしていた。ところが、突然寄居町に家を買って、一人暮らしを始めてしまった。

長男の話では、喧嘩をして出て行ったのではなく、一人でのんびりしたいということとで父の我がまを認めたらしい。

次男の礼二は、同じ石本産業の筑波工場で工場長をしている。

そして長女の美智代は、ごく平凡なサラリーマンの妻として嫁いでいる。

三人の子供たちは啞然としていた。特に長男の一郎は、ひどく嘆き悲しんでいる。

石本良一の死亡推定時刻は、昨日の午後六時から午後九時の間である。

死因は絞殺であった。

## 第二章 影なき不審者

「昨日の四時までは隣の倉田さんと暮を打っている。倉田さんの話では、その後外出した様子はないと言っています。午後の暮を打つと大体四時か五時頃になるので、夕食の買物に例の音のする自転車で買物に行くそうですが、昨日は音がしなかったと言っています」

山本刑事が一気に喋った。

「そうすると、その後四時過ぎに何者かが侵入して殺害したわけだ」

課長が山本の目を見て言った。

「そうです。室内の様子から見ますと物取りの犯行に見えますが、どうも物取りに見せかけた犯行に思うのですが」

「それはなぜだね？」

「まず一つは、不審な人物の目撃が無いということと、あのダンスの散らかし方は何か物を探すのではなく、ただ単に散らかしてあるといった状況だからです」

「物取りの犯行ではないと言っただな」

「ええ。それと死亡推定時刻が午後六時から九時となると、今の六時はもう薄暗いですから、石本さんは用心深い人だそうで雨戸を閉めていると思うのですが。明るい内、おそらく五時頃に犯人がやって来て話し込んでいる内に暗くなって来た。でも、用心しなくても良い相手なのでそのまま話し込み、何かトラブルが生じ、殺害された」

「ちよつと飛躍してはいないか？ 雨戸を閉める五時半でも六時でも、閉める前に犯人が宅急便か何かに装って玄関を開け、犯行に及んだということもありうる」

と言って、課長は黒板を睨んだ。

「ところが、現場は袋小路のためか、車が入って来れば近所の人  
すぐに分かるって言っていました」

若い木村刑事が口を挟んだ。

「昨日は一台の車も入って来てません。人も明るい内はだれも来な  
かったと、近所の人が言っていました。下が砂利敷なので人が歩いて  
も分かるんだそうです」

「そうか。石本さんの家は一番奥だから、だれか通れば砂利の音で  
分かるわけだな」

課長は黒板を見ながら呟いた。

「ということは、明るい内はだれにも分からずにそこを通ることは  
不可能なわけだ。まさか、そろりそろりと歩いて来れば余計に怪し  
まれるからな」

山本は、課長に顔を向けた。

「そうですね、明るい内はまず不可能だと思います」

「じゃ、暗くなってからそろりと来たっていうのか？」

「さあ？」

「暗くなってからじゃ駄目なんだよ、暗くなれば雨戸が閉まってな  
ければいけないんだ」

「犯行の後、犯人が雨戸を開けて行ったとしたら？」

「それはないだろう。わざわざ死体がここにありませんとはしないだ  
ろう。音もするし」

「それはそうですね」

「庭の方からは入れないのですか？」

若い町田刑事が聞いた。

「庭の先は深い崖になっていて、よほど訓練された者以外は無理で  
しょう」

木村が黒板の地図を見ながら言った。

「それでは」

課長が机を叩いた。

「山本と木村は付近を当たってくれ。後は三人の子供のアリバイと、

被害者の友人関係を洗うんだ」

山本と木村は、再び現場へ向かった。

被害者、石本良一の家は、鉢形駅を降りるとすぐに県道があり、それを横断して坂道を登ると住宅街があり、その一番外れの一角にある。

そこは、舗装された道から砂利道の横道があり、右と左にそれぞれ三軒づつ家があつて、道の突き当たりには二軒の家がある。その右側が石本良一の家である。辺りはひっそりとしていて、静かな場所である。

「この辺で降りて歩いてみよう」

車を降りると報道人がしつこく寄つて来たが、素知らぬ顔で二人は砂利道へと足を運んだ。

ガシャ、ガシャと音がする。

「なるほど、木村君みたいに痩せていても音がするな」

木村刑事の細い体でも、ガシャガシャと音がした。

「そうですね、私でも音がするので、だれか入って来ればすぐに分かりますね」

「今朝は気にならなかつたけどな」

入口の家の窓から、五十年配の女性が不審者は逃さないと言つた顔でこちらを見ていた。

山本は会釈をした。

「こんにちは。寄居署の山本です」

フェンス越しに声を掛けた。

警察の者と聞いて安心したのか、その女性は一呼吸おいて会釈をして来た。

「ここの砂利は気になるほど大きな音がしますね」

「ええ、ですから今朝来た刑事さんにも言つたのですが、たとえ子供が通つてもすぐに分かります」

「そうですね、この音じゃ気がつきますね。ところで、昨日の夕方ずっと家におられたのですか？」

「ええ、ずっと居ました」

「そうですね。窓を閉めても砂利の音が聞こえますか？」

「そうですね。窓を閉めても結構聞こえて気になるのよ」

山本は家の上からせてもらい、木村刑事に道を歩いてもらった。それもゆつくりと。それでも、窓を閉めた家の中まで砂利を踏む音が聞こえた。

「確かに聞こえますね。いや、ありがとうございます」

山本は軽く会釈をして玄関を出た。

この袋小路の入口にはロープが張ってあるので、報道人はここまでは入れない。

山本は石本家の庭に回った。庭のフェンスの向こう側を、植木の合間から覗いた。

そこは小さな沼になっており、水面まで五・六メートルの距離があった。その水面までが断崖絶壁になっている。

「なるほど。向こう岸から泳いで来ても、この垂直の崖を登るのはまず無理だな」

「そうですね、よっぽど身が軽くても、ちょっと無理ですね」

「となると、後は隣りの家から忍んで来たことになる」

「ええ。でも隣家の庭を通って、フェンスを跨いで来るにはそれこそ不審者ですよ」

「そうですね」

「それに砂利の音を知らない者なら、そのままその道を通って来て当たり前ですが」

「うんうん」

山本は、木村の言うことを頷きながら聞いている。

「もし、その音を知っていて、そこを通るのがまずいと思って、隣家の庭ごしからフェンスを越えては来ないと思えますが」

「それはそうですね。私が犯人ですって言ってるようなもんだな」

「そうですね」

「では、それを知っている者がなぜ、わざわざ明るい内にやって来

て殺さなければいけなかったのか」

「雨戸が開いていたということですね」

雨戸や戸の所には、指紋を取った跡がいつぱい残っていた。

「暗くなつてから来てもいいんじゃないか？」

「そうですね。時間の限られた人物かも知れませんね。そして顔見知りの」

「それだ。何度か来ていて、砂利道の方から行くと言がするのを知っている。そして、顔を見られたくないで違う方法で石本さんの家に行き、暗くなるまでに帰っていなければいけない人物」

「しかし、その違う方法というのが分からないなあ」

木村が、沼を見ながら呟いた。

### 第三章 異母兄弟

三人の子供たちには完璧なアリバイがあつた。

害者の友人関係の方は、自分が社長をしていた時の仕事仲間で、靴屋の木下という人ぐらいしか付き合いがなく、それも社長を退いてからは殆ど付き合い合つてはいなかった。

「最後に会つたのはいつ頃でしたか？」

人の良さそうな顔をした木下は、嫌な顔一つしないので応えてくれた。

「去年の暮に相談があると言つて、ふらつと来たことがある」

山本と木村は、池袋の木下靴店に来ている。

「どんな相談でした？」

「はい。長男と次男の仲が悪く、会社を二つに分けようか悩んでいました」

「二つに分けるといふことは、長男と次男に分けるといふことですか？」

「そうです。長男は社長をやっているからいいのですけど、次男は茨城の筑波で工場長をしており、満足してないと言つてました」

木村は頷きながら手帳に書いている。

「それで、具体的にどういふふうにしたかって言ってみましたか？」  
「筑波の工場を別法人にして、次男を社長にする。そして、石本グループの一員としてやって行こうと、考えていたみたいです」  
「なるほど。次男とすればありがたいことですね」

木村が山本に言った。

「そうだな。でも、長男としては阻止したいだろう」  
「そうなんですよ。次男を取れば長男は面白くないし、長男を取ればそのままゴタゴタが続くしで、悩んでいましたね」  
「財産を持つと大変ですね」

木村がため息をついた。

「ところで、石本産業の中で何か変わったということはないですか？ この話が出た頃あたりに」

「ええ、いつもと変わりはありません」

「そうですか。ところで、木下さんのところは、石本さんの筑波工場と取引はあるのですか？」

「いや、ありません」

「ということは、木下さん」

「はい」

「あなたは、次男とは面識がないのですね」

「ええ、会ったこともないです」

「そうですか、分かりました」

山本は、店内を一回り見渡した。

「ありがとうございます。何か気づいた点がありましたら連絡下さい」

二人は会釈をして、木下の店を出た。

「長男も次男も、このことを知っているかが問題だな」  
「そうですね」

二人は板橋の工場へ向かった。

東武東上線の上板橋駅から十分ほど歩くと、石本産業の工場が

ある。その隣に長男の住む石本邸があった。邸の前は、葬儀の準備で慌ただしく人が動いていた。

工場の方は、入口の鉄柵に休業の貼り紙がしてあった。鉄柵から中を覗いたが、シーンと静まり返っていた。

山本と木村は石本邸に戻り、玄関から中を覗いた。

「ごめんください」

奥から返事がして、お手伝いさんらしい女性が出て来た。

「石本さんの身内の方はおりますか？」

「はい、どちら様でしょうか？」

山本は警察手帳を出した。

「寄居署の山本と言います」

「ちよっとお待ち下さい」

と言つて、その女性は奥に引つ込んだ。

しばらくして、奥の方でガヤガヤと声が聞こえ五十年配の主らしい人物が出て来た。

「まだ何か？」

でつぶりとお腹に脂肪が着いており、うさん臭そうな顔で山本を見た。

「お取り込み中申しわけありませんが、聞きたいことがあります。そんなに時間は取らせません」

「それでは、こちらへ」

と言つて応接間に案内された。かなり広い部屋で調度品も立派な物が置いてあった。

山本はソファに腰掛けるなり聞いた。

「あなたが石本さんの長男ですね」

「はい。長男の一郎です。先日も他の刑事さんに色々聞かれたのですがまだ何か？」

「ええ。あなたと次男の礼二さんとのことを聞きたいのですが」

山本は、一郎の顔色を見ながら喋った。

「仲があまり良くないそうで……」

一郎が、ムツとした顔をした。

「だれがそんなことを言ってるんですか？ 私と礼二は仲が良いですよ」

一郎が、コホンと咳払いをした。

「たとえ仲が悪かったとしても、関係のないことじゃないですか？  
一体だれがそんなことを」

「いやいや、近所で小耳に挟んだものですから、気になさらないで下さい」

コンコンとドアがノックされ、先ほどのお手伝いさんがお茶を運んで来た。

「お父さんは、生前だれかに恨まれてたとか、何かのいざこざに巻き込まれてたとか聞いたことはありませんか？」

「いや。父は母の死後、埼玉の寄居で一人暮らしを始めてしまったので、あまり周辺のことは良く知りません」

「そうですか。お父さんが社長をしてた時はどうですか？」

「その時私は専務をしていましたが、父は人に恨まれるようなことはしてないと思います」

「では、仕事の上で何かトラブルはございませんでしたか？」

「はあ、私共の会社は古くから同じ付き合いの業者ばかりでして、トラブルをしようにもしようがありません」

「金銭的なものでは？」

「うちはそんなに立派ではないですけど、毎年ちゃんと税金を収めています」

一郎はタバコを取り出し火をつけた。

「業者さんには一切迷惑を掛けてはいけません。特に私が社長になってからはなおのことです」

一郎が胸を張った。

「以前は？」

「父の時代もなかったと思います」

「そうですか。最後にもう一つ聞きますが、お父さんから会社のこ

とで何か相談がありませんでしたか？」

「と、言いますと？」

「いや、大したことではないのですが、弟の礼二さんにも経営を任すとか」

山本が、かまを掛けた。

「えっ！」

一郎は眉間に皺を寄せた。

「だれがそんなことを言ってるのですか？」

「いや、近所で小耳に挟んだものですから、気にしないで下さい。どうもありがとうございます」

山本が頭を下げた。

「ところで、弟の礼二さんはいらしてますか？」

「ああ、来てるが」

一郎は再びムツとした。

「ちよつと、お目に掛かりたいのですが」

「我々を疑ってるんですか？」

「いや、そういう訳ではありませんので」

「先日の刑事には父の亡くなった日の行動を詳しく聞かれ、犯人扱いされたんですよ。おそらく弟の礼二にも同じことを聞いたと思います。全く、腹が立ちますよ」

「いや、そういう訳ではありません。これも仕事でして、一人一人関係のある人から消して行かねばならないのです。気を悪くされたのでしたら謝ります」

「別に謝らなくても結構ですが」

一郎がドアの方に目をやった。

「礼二を呼んで来ますが、変な噂のことは言わないで下さい。あいつも神経を尖らせていますので」

「分かりました」

一郎が部屋を出た。

「会社の件は聞いてなかったみたいですね」

木村が、ぼそつと言った。  
「うむ」

山本が頷いた。

しばらくしてノックがあり、痩せて背の高い男が現れた。

「石本礼二です」

礼儀正しく、山本に頭を下げた。

「寄居署の山本です」

山本も頭を下げた。

「忙しい時にすみません」

「いや、構いません。犯人逮捕に少しでもお役に立てるなら、何でも協力します」

長男とは打って変わって如才のない好人物である。

「先日、他の刑事が色々聞きに来たと思いますが、今日はあなたとお兄さんの関係を聞きに来たのです」

「私と兄との関係？」

「そうです。先ほどお兄さんに聞いたら、そんなことはないと思われましたが」

山本は、わざと遠回しに言った。

「どんなことですか？」

礼二が不安な顔になった。

「実はある問屋さんが、あなたがた兄弟は仲が悪く、分裂するのではないかと心配しています」

山本は咄嗟に嘘をついた。

この好人物なら本当のことを言うのではないかと考えた。

礼二は躊躇しながらも、喋った。

「言いづらいのですが、私と兄とは腹違いの兄弟です」

山本と木村は顔を見合わせた。

異母兄弟だと初耳である。

「私は物心ついた時から、兄にさかわらず言いなりにやって来ました。この仕事に入る時も、高校を卒業と同時に、兄の言われるまま

筑波の工場で働くようになりました。そして、母が亡くなるまで二十年間、一生懸命働きました。母と言っても私とは血の繋がりはなく、養母であります。私の母は、私が五歳の時に亡くなり、その後私はこの家で育てられました。ずっと虐げられて来ましたが、何とか高校まで出してもらいました。そして、高校を卒業した私は筑波の宿舎に住まわされ、工場で働かされたのです」

礼二は淡々と喋った。

「なるほど、辛い日々が沢山あったのですね」

「ええ、でもだれも恨みませんでした。それより早く一人前になって、この工場の跡を取るんだと。この一念だけで頑張つて来ました」

「その時、兄の一郎はどこに？」

「兄は本社で働いていました」

「工場ではなく？」

「ええ。父の運転手をしたり、秘書みたいなことをしていつも一緒に歩いていました」

「あなたは？」

「私は、ただ黙々と筑波の工場で職工として働いていました」

「普通にですか？」

「そうです。ごく普通にです。息子と言うことを隠して働きました。苗字が違いますので、だれも分かりませんでした。父は兄の手前、そうしたのだと思います」

「では、殆ど付き合いはなく？」

「ええ、丸つきりと言っていいほどなかったです。なおさら私は燃えました。絶対にトップになってやるんだと」

礼二が唇を噛んだ。

「その気持、良く分かります」

礼二の目は燃えていた。

「私は、とにかく二十年は頑張ろうと。そして、十八年目に工場長になりました。後二年、又がむしゃらに働きました。そして二年が経った時、突然母が亡くなったのです」

「癌と聞きましたが」

「はい、そうです。私には何も知らせてくれませんでした。亡くなつてから連絡があり、工場長としての弔問しかさせてもらえませんでした」

「それは辛かったですね」

「でも世間には内密のことでしたから。役員やら幹部などが集まってきましたからね、余計です」

「今は知ってるんですか？」

「ええ。母の一周忌が済んで、私は父を訪ねたのです」

「ほう。その時お父さんは会長職ですね」

「そうです。私の二十年間の努力、そして高校を出るまでの屈辱的な生活、全てをありのままに話しました。それを聞いて父は泣いていました」

「そうですね」

「早速、父は私を役員にしてくれたのです。この時に、兄とは異母兄弟ということが分かってしまったのです。他に役員になれる人物が居たにもかかわらず私になったものですから、本社の工場で内部紛争が起こり、事のいきさつを父が発表したのです」

「その本社の工場で、もめた人物は？」

「はい。父がこのことを発表した翌日に、退職しました」

山本と木村が目を輝かせた。

「その人の名前は？」

「相田さんと言う人です」

「どこに住んでいるか分かりますか？」

「確か川越と聞いてますが。人事課に聞けば分かりますと思います」

「分かりました。後で調べさせて貰います。話が逸れましたが、それから？」

「はい。父は、兄には内証で筑波の工場を私にやるからもう少し辛抱しろと言いました。私はようやく念願が叶うと、その事を肩身の狭い思いをさせた女房にだけ伝え、夫婦喜び合いました。ところが

喜びもつかの間、兄がいきなり本社の総務をやってくれと言って来たのです」

「総務を？」

「ええ、私を筑波から追い出そうとしたのです」

礼二は言葉尻が強くなつて来た。

「何のためにここまでやって来たのか。兄は父の魂胆を薄々気がついていたので。筑波の工場を私に取られてなるものかと、それで本社の総務を見てくれと言って来たのです」

「汚い野郎だな」

木村が思わず口走った。

「そうですね、汚い人間です。それから兄と私は対立し、そうこうしている時に今度の事件が起こったのです」

「兄さんを疑っていますか？」

「もちろんです。私は何も言わないですけど。この家に入れて貰ったのも今日で二回目です。義姉さんなんか一言も口を聞いてくれません。もちろん兄とも殆ど口を聞きません。廊下ですれ違っても知らん顔です」

「それはひどい」

「別に構わないですけど」

礼二が寂しそうに言った。

「ところで、妹さんがおりましたね」

「ええ」

「来てたら会いたいのですが」

「泣きつばなしで無理でしょう」

泣いてばかりで、だれも声を掛けられない状態だという。

「そうですね、分かりました。貴重なお時間を取らせました」

「いや、まだ何かありましたら、今日の内に筑波へ帰りますので、連絡を下さい」

「えっ、今日帰るんですか？」

「何かと世間体を気にするみたいですので」

礼二が頭を下げた。

山本と木村も頭を下げ、石本家を後にした。

#### 第四章 侵入者の謎

蔵造りの町並が、江戸情緒をしのばせる。その中を歩いているとまるで映画のセットの中に居るみたいである。

小江戸と呼ばれる川越に、木村刑事は来ている。

人事課の話では、相田富男の実家が川越で土産屋をやっており、その家業を継いでいるということであった。

木村は土産屋の屋号をキヨロキヨロ見ながら、相田屋を探し歩いた。通り面だけでなく、横丁に入っても土産屋が続いている。

木村は一軒の土産屋に飛び込んだ。

「すみません」

奥から女の人の声が出た。

「ちょっと伺いますが、相田屋という土産屋はどの辺でしょうか？」

三十過ぎの愛想の良い婦人が、丁寧に教えてくれた。

木村は教えられた通りに歩いて行くと、間口二間ほどの小綺麗な店構えの相田屋があった。

「ごめん下さい」

奥から女の人の声が出て、娘が出て来た。

「相田富男さんはいらっしゃいますか？」

「はい。おりますが？」

娘は首を傾げた。

「どちら様でしょうか？」

「私は寄居署の木村と言います」

木村は手帳をかざした。

娘は不安な顔になった。

「父はおりますが、警察の方が何か？」

「聞きたいことがあります」

娘は一瞬戸惑ったが、

「ちよつとお待ち下さい」

と言つて、奥に引つ込んだ。

やや間があつて、

「石本会長の件ですか？」

と言つて痩せて小柄な人物が出て来た。

「相田富男さんですね」

「そうです」

店の奥に腰を降ろし、当時の様子や石本兄弟のことなどを詳しく聞いた。

石本兄弟には怒りを露にしたが、会長の石本良一については敬意を表していた。相田は、現場の第一人者として首脳陣にまじり頑張つて来たのに、こういう結果になり残念ながら会社を去つたのだと言つ。会長には恨みがないと言えば嘘になるが、自分を育ててくれた恩の方が強いと言つ。

木村は、相田の当日の行動をメモし、相田屋を出た。

一方、山本刑事は次男礼二の身辺を洗つた。

礼二の生まれた所は、墨田区向島。母親の名前は黒木道子。当時、道子は芸者をやつていて、石本良一が見染めて困つようになり、やがて礼二が生まれた。

しかし、道子は芸者の時の無理がたたつてか体が弱く、礼二を生んでからは特に弱まり、お手伝いさんなしでは生活できない状態が長く続いた。そして、礼二が五歳の時道子が亡くなった。その後、礼二を次男として石本家に入れるのだが、かなりのもめ事があつたのはだれもが察するあまりである。

黒木道子には親兄弟がなく、だれも訪ねて来る者は居なかつたという。葬儀もひっそりとしており、弔問に来る人は殆どなかつたらしい。当時、向島の家の隣に住んでいた人から聞くことができた。

「相田富男のアリバイは完璧でした」

木村が課長に言った。

「恨みを持つている相田が白となると」

課長は、黒板に書いてある相田富男の名前をチヨークで消した。先に書いてある、石本一郎と石本礼二の上にもチヨークが引かれてある。

「黒木道子の身内の線が濃いと思ったが、身内はなしか。山さんの勘が正しくなければ物取りの犯行かも？」

「いや、そんなことはないと思います」

山本が反発した。

「あのタンスの乱れようは故意にやったものです。物取りに見せかけても、私の目をごまかすことはできません。怨恨に違いないと思います」

山本が自信満々に言った。

「そうか。ここまで来ても山さんがそこまで言うのなら、間違いないだろう」

課長は黒板の前に立ち、皆を見た。

「現場には、遺留品らしい物は被害者の首に巻かれていたものだけだ。それもごくありふれたタオルで、白の無地のやつで寄居町老人福祉会と印刷されている。出所は去年の夏、寄居町で花火大会を催し七十歳以上の人を招待した時に配ったものだ。当然、被害者の家にあっても不思議ではない。犯人は咄嗟に置いてあつたタオルで首を絞めたのかも知れない」

「そうだと思います」

山本が頷いた。

「顔見知りの者と話をしていて、何かの行き違いでカツとなって殺してしまった。犯人は殺した後で恐ろしくなり、物取りの犯行に偽装した」

「その推理が正しいとしてだ」

課長がチヨークで黒板を叩いた。

「犯行時刻にどうやって行ったかだ」

「入口の家の人が、たまたま電話をしていて気がつかなかったとか」  
町田刑事が言った。

「いや、あの日は電話を掛けても掛かっても来なかったと言っている」

「その時、トイレに入っていたとか」

「それは有り得ることだ。ところが、あの家のトイレは道路側にあつて、トイレに入ると外の音がもつと良く聞こえる」

フーツと部屋中のため息がもれた。

「では、庭の方からはどうです。沼をボートで渡り、崖をロープでよじ登つて侵入した」

「そこが分からないところだ。崖にはよじ登つた跡はない。しかし、垣根のところには人が通つたかどうか分からないが、僅かながらの跡はある。でも、それがいつ着いたものは定かではない」

「仮に沼から来たとすると、崖には何らかの跡が残ると思うのですが」

若い橋本刑事が言った。

「いや」

山本が何かに閃いたらしく、橋本を制して椅子から立ち上がり、黒板の前に行き課長に言った。

「あの沼は柵がなく、危険なのでだれも近寄らない所です。まして、あの日の五時頃という風が強くて、肌寒く外に出ている者は少ないと思います。犯人はあの辺のことを良く知っており、道路からでは不審者に見られるので人の居ない沼から侵入した。又、害者は用心深いため、暗くなつてからでは家に上げてもらうことが不可能と思ひ、明るい内に侵入した。これは、それほど親しくしている人物ではないのだと思います。あきらかに殺害を目的として入り、物取りに見せかけて逃げたのです」

山本が、課長に自分の推理を喋つた。

「では、どうやって逃げたのですか？」

橋本は、山本の推理を興味深く聞いていた。

「それは色々考えられる。垣根を越えてボートに乗り、崖に着いた傷跡を消して逃げた。ボートはゴムボートで、空気を抜いて車に入れて逃げる。それとも、夜遅く回りが寝静まったところで堂々と道路から逃げ、対岸から違うボートで、行った時のボートを回収し、崖の傷跡を消して逃げる。と、色々なことが考えられる。ただ、だれにも分からずにそれを実行するのは疑問だが……」

山本が首を傾げた。

「その通り。目撃者がいない限り何とも言えない」

課長が言った。

「それに、普段人がいないからと言って沼をボートで渡り、崖をよじ登るとなるとだれかに見られる危険性はある。果たして、そこまでやるかだ」

「そこなんです。その危険性に引っ掛かるんです」

山本が頭を叩いた。

## 第五章 タオル

一ヶ月が過ぎた。

目撃情報は皆無に等しく、僅かな情報も信憑性に欠けるものばかりであった。

山本刑事と木村刑事は、もう一度動機のありそうな人物を片っ端から洗い直した。

害者、石本良一の交友関係、仕事仲間、親戚筋。長男一郎、次男礼二、長女美智代、美智代の夫まで、同じことを調べ上げた。

しかし、結果は同じであった。不審なものは何も出ず、アリバイも再度完璧度を増していた。

相田富男の交友関係も徹底的に調べたが、何も出て来なかった。

「動機のない殺人。やはり物取りですかね？」

木村がボソリと呟いた。

「そうかも知れんな。俺の目も節穴になったかな。ハハハ」

山本が寂しく笑った。

「遺留品はタオルだけですからね」

木村が下を向いて唸った。

「あのタオルの出所は調べ上げたし。七十歳以上の招待客に、一本づつあげたタオルが害者の家にあった。何の不思議でもない。タオルをあげた人物も全部当たった。皆、お年寄りのためか大事そうに仕舞ってあったし。大事そうに……ということとは……」

木村はぶつぶつ言いながら、ハツとして腰を上げた。

「あのタオルはお年寄りにとって大事な物なんです。だから皆、タンスの中などに仕舞っていたのです。害者だけがなぜ使っていたのですかね？」

木村が声を荒げた。

「そうだな」

山本も腰を上げた。

「まだそのままになっているはずだ」

寄居の家は、犯人が分かるまで警察に預けていた。

山本と木村は害者の家に飛んだ。

車を広い道に停め、砂利の鳴る道へと二人は足を進めた。ガシヤガシヤと砂利が鳴り、侵入者を拒んでいるようであった。

鍵を開け、中に入った。玄関の鍵はプッシュ式で、出る時は鍵がなくても掛けられる構造である。二人は手袋をし、タンスの引き出しを開けた。衣類やらタオルやらが入っている。ビニールを被った、まだ使っていないタオルも沢山あった。

タオルを一枚づつ表裏にして、そこに書いてある字を読んだ。全部に目を通したが、寄居町老人福祉会の文字の書かれたタオルは見つからなかった。

「どうして害者だけはこのタオルを使ったのですかね？」

「うむ」

「後の全ての人は大事そうに仕舞ってあるというのに」

「分かん」

山本は、年寄りの考えは分からないといった表情をした。

「しかし、まてよ。犯人はタオルで首を絞めて殺そうと自分で持って来て、そのタオルを残し、害者のタンスの中から新しいタオルを持って行った」

「ちよ、ちよつと待って下さい」

木村が慌てて言った。

「初めから殺すつもりで侵入したのは分かりますが、わざわざ招待のタオルを持って来なくてもいいじゃないですか？」

「たまたまかも知れない。それとも犯人はそのタオルに、それほど執着してなかったのかも知れない。ただ、だれもが一本しか貰っていないタオルを死体に巻き付けておくわけにはいかないので、自分はそのままにしてタンスの中から新しい老人福祉会のタオルを持って行った」

木村が手を叩いた。

「それかも知れないですね。首に巻き付けたタオルを持つてるなんて、嫌ですからね。それに皆が大事にしているタオルですから、自分も大事におこななければ怪しまれる危険性がありますからね」

「そうだよ、それに違いない」

「でも」

「うん？」

「でもですよ」

木村が腕を組んだ。

「七十歳の方が、タオルで人を殺せますか？」

「相手も年寄りだから、できたと仮定しよう」

「この推理が正しければ、害者の家のタオルが犯人の家にあるわけですね」

「その通りだ。後はそのタオルをどう発見するかだ」

「そうですね」

一条の光が見えた。

「タオルは全部で五十三本と言ったな」

「はい。配ったのは五十三本で、作ったのは百本です。残りの四十七本は役場の倉庫にありましたから間違いありません」

「ということは、五十二本のタオルが、この町の年寄りのダンスの中にあるわけか。それもちゃんとしてあるわけだ。その中から害者の指紋が出ればそいつが犯人だ」

「そうです」

「よし、署に帰って報告だ」

二人は署に戻り、課長にこのことを話した。

急いで、五十二本のタオルを集めることとなった。しかも理由を告げずにである。必ずその内の一つに、害者の指紋が付いているわけである。山本の推理が正しければのことだが。

捜査員全員が集められ、一斉にタオルを回収した。回収の時に不審者が出ればそれに越したことはなかったが、殆どの家では嫁が対応したため、その辺のところは難しかった。

## 第六章 夢奴

タオルからの指紋の採取は中々はかどらなかつた。皺くちやのビニールの上ということも困難を極める材料となつた。鑑識は夜も徹して五十二本のビニールに入ったタオルと戦っている。

そして、山本と木村は向島へ向かつた。

三十六年前、礼二が五歳の時に母親の道子が亡くなった。道子は、礼二がお腹に入つたので芸者をやめ、困われるようになった。

山本は、その当時の芸者仲間に話を聞きに来た。黒木道子のことを、知っている者が居るかどうか分からないが当たってみた。

「俺は置屋を当たるから、君は役所関係をもう一度当たってくれ」

「はい、分かりました」

山本は当時の隣人の家に寄り、黒木道子が居た置屋を教えるもらつた。

今は変わっているかも知れないということだが、教わつたとお

りに歩いて行くとその置屋は同じ場所にあった。下町というのはそれほど変化はしてなく、昔のままを残している。

「ごめんください」

山本は警察の者と名乗り、三十六年前にこの置屋に居て、身受けされて幼い子を残し、亡くなった芸者を知っているか聞いてみた。

「その頃女将をやっていたお母さんなら分かると思うわ。ちょっと待ってて」

若い娘は、歯切れ良く山本に言った。

しばらくして、七十前後の婦人が出て来た。

「ご苦労さまです」

その婦人は丁寧な頭を下げた。

「その子でしたら、夢奴のことだと思いますが」

「夢奴？」

「はい」

山本が手帳に書いた。

「あなたは？」

「私はその頃女将をしていました。当時は七・八人の芸鼓が居まして、その中に夢奴と言う名の芸鼓が、ある人に身受けされ囲われたのです」

「夢奴の本名は？」

「黒木……」

元女将は少し考えて、

「……道子って言ってたわ」

と喋った。

間違いない。黒木道子が夢奴だろう。

「身受けした人の名前は覚えていますか？」

「名前は覚えていませんが、確か浅草で石屋をやっていると聞きましたか……」

「石屋をですか？」

「ええ。確かそう聞いた記憶があります」

「身受けしたのは、その方に間違いないですね？」

「ええ、夢奴のことでしたら間違いありません」

「もう一度聞きますが、その身受けした人の名前は呼び名でもいいですから、何とか思い出せませんか？」

山本が食い下がった。

「うーん。くま……くに……そんな名前だった気がするんですけど、思い出せないわ」

「石とは違いますか？」

「いし……ね」

元女将は、首を振った。

「石屋の石です」

「いや、違つと思つけど」

「石本と言つ名前ではないですか？」

山本は、石本の名前を出した。

「石本ねえ。聞いたことのない名前ね」

「そうですね。三十六年前に亡くなつたわけですが、身受けされたのはその五・六年前ですね。五つの男の子を残して亡くなつたのですから」

「そうですね、亡くなつた時葬儀に行つたけど、確か五つか六つくらいの男の子が居ましたね」

と言つた時、その元女将がハツと目を剥いた。

「そう言えば」

「何か？」

「葬儀には私と、夢奴と仲の良かった豆千代と一緒に رفتたんだけど、その何とかという石屋のダンナではなく、違つダンナだと言つてたわ」

「えっ！」

「そうそう、思い出した。夢奴をめぐつて石屋のダンナと、もう一人入れ込んでいた人が居たつて言つてた」

「石屋以外にもう一人？」

山本が色めきたった。

「そう。石屋が身受けしたのを聞いたその人は、夢奴が忘れられなくて何度も夢奴の所へ行つた話を聞いたことがある」

「その人物は分らないですか？」

「豆千代なら良く知っているとと思うけど」

「その人は今どこに？」

「茨城に居るわ。毎年、年賀状をくれるから。ちょっと待ってて」

元女将が奥に消えた。

山本の手帳に当時の相関図が書かれた。

夢奴を身受けしたのは浅草の石屋。そして、その後ある人物が石屋から夢奴を取る。夢奴が亡くなった時、そのある人物が葬儀を出している。その時、五歳の礼二が居た。

ある人物とはだれだろう？

「ごめんなさい」

年賀状を持って来てくれた。

そこには、茨城県土浦市・・・佐伯ハツ子と書いてあった。

「ありがとうございます。最後にもう一つ聞きたいのですが、夢奴に身内はだれもいないと聞きましたが、そのことについて何か知りませんか？」

「夢奴は物心つく前に孤児院の前に捨てられていて、その孤児院で育つたと言っていました。そして、物心ついた時にその院長に色々と聞いたり調べたりしたらしいのですけど、何も分からずじまいだったようです。まだ戦後のどさくさの中で分からないのは無理のない話よ。そして、夢奴は十五の時に孤児院を飛び出し、行く当てもなく何日もフラフラしたあげく、うちにフラツと飛び込んで来たの。何日も物を食べていないって言うので面倒を充てあげたら、ぜひ働きたいって言うので下働きをさせてあげたのがきっかけね」

「なるほど」

「そして、夢を持つようにと夢奴とつけたの」

「そうですね。どうもありがとうございます」

山本は丁重に礼を述べ、置屋を出て浅草に向かった。浅草駅前の派出所で石屋の場所を聞き、一軒一軒訪ね歩いた。

浅草に石屋の数は多く、古くからやっている店が殆どであった。昔、困っていた女が居たかどうか聞くわけにもいかないもので、七八十歳くらいの年寄りの居る石屋だけを手帳に残して来た。

署に戻り、木村の報告と鑑識の結果を聞いた。

## 第七章 かんさん

木村刑事の報告では、当時の黒木道子について、役所、斎場、葬儀屋などを調べたが、当時の記録は何も残っていなかった。又、鑑識からの報告では、タオルから石本良一の指紋は発見されなかった。

翌日、山本刑事は豆千代に会いに、土浦に飛んだ。土浦駅よりバスで二十分ほど揺られ、豆千代の家に着いた。表札が二つ出ており、一つには佐伯の名前があった。

「ごめんください」

「どちらさまでですか？」

「私は寄居警察の山本と言います。佐伯ハツ子さんはおいででしょうか？」

やや沈黙があつて、

「はい、どうぞ」

と、言う声に山本が玄関を開けた。

「どうぞ、お入りください」

応接間に通された。

「遠い所をご苦労様です。女将さんから電話がありまして、刑事さんが行くから当時のことを良く聞かせてあげてって言われたものですから」

六十年配のご婦人が応対した。

「いやいや、恐縮です」

「夢奴の話が出るなんて、もう懐かしくて昨日は一時間も女将さんと話をしてしまいました。ハハハ」

屈託なく笑った。

「私はご覧のように体が小さいので豆千代なんて名前を貰いましたが、夢奴とは良い名前を貰ったわ。良く夢ちゃんは良いわねって言うってたの。ハハハ」

良く喋って良く笑う。

「黒木道子のことですが」

山本が切り出した。

「そうそう、黒木道子って言うのよね。夢ちゃん夢ちゃんって言うてたから、すっかり忘れてたわ」

「その黒木道子こと夢奴ですが、身受けした人物を覚えていますか？」

「ええ。浅草の石屋で『かんさん』と言う人です」

「かんさん？」

「確か貫郎と言う名前でした。苗字は分からないわ。名前で呼んでたから」

「貫郎と言うのは確かですね？」

「ええ、間違いありません。でも『かんさん』は夢奴を身受けしてしばらくしてからいなくなりましたわ。そして、すぐに靴屋のダンナがついたって聞いています。とにかくやきもち焼きで、中々外に出してもらえないって嘆いていたのを覚えています」

「その靴屋の名前を覚えていますか？」

「確か、石なんとか・・・そうそう石本って言うてたわ」

山本はお茶を一口飲んだ。

間違いない。心の中で呟いた。

「靴屋の石本さんですね」

「そうです。靴屋の石本さんです。確か板橋の方だと聞いた記憶があるわ」

「今でも板橋にあります。ところでその『かんさん』は今どこに居るか分かりますか？」

「いや、分かりませんわ。当時『かんさん』は大店の若ダンナで働き者でもあり、店も順調に行つてどんどん大きくなつて行つた。ところが、ある日夢奴を身受けしたことが大ダンナに分かつてしまい、店を出されてしまったのです」

「なるほど」

「店を出された『かんさん』は、困っている金もなくなり、やけになつて店に忍び込み金を盗みだした。その金を夢奴に全部渡して雲隠れしてしまつた。夢奴を見染めていた石本さんはこのことを聞きつけ、金の力では負けないと『かんさん』の盗んだ金を全部石屋の大ダンナに返し、自分が新たに夢奴を困つたのです」

「なるほど」

「『かんさん』は大ダンナにさえ分からなければ順風満帆で時を過ごせたのに、そんなことで妻子を捨てて雲隠れをしてしまつたのです。しかし、『かんさん』として見れば夢奴のことが気掛かりで、たまに様子を見に来てたらしいわ」

「危険を犯してまで？」

「ええ、『かんさん』の人柄がそうだから。『かんさん』は夢奴に心底惚れてましたから。自分で幸せにできなければ、せめて遠くから見ていてやりたいという人でしたから」

「そうですか」

「そして、かなり経つたある日、夢奴に会い事実を聞かされたのです。事実を知つた『かんさん』は、殺してやると夢奴に言ったのです」

「殺してやると？」

「ええ。大ダンナに身受けのことを教えたのは石本さんだったので」

「汚い奴だ」

「ところが、夢奴としては今更元に戻るわけではないし、自分と

しては『かんさん』がいない分、子供と暮らして行けるだけで、石本さんの存在は我慢すると論じた。そして、その時子供は『かんさん』の子供であると打ち明けたのです」

「えっ！」

山本が驚いた。

「そう。その子供は『かんさん』の子供なの。身受けされ、しばらくして身ごもったらいいんですけど、すぐにこんなことが起きてしまつて、石本さんには内緒で石本さんの子供と言つことと育てた」

「そうか」

礼二は石本の子供ではなかったのか。山本はぶつぶつと独り言を言った。

「それで『かんさん』は、夢奴が幸せならばそれで良いとして、又、姿を隠した」

「そうでしたか。それでその『かんさん』の店と言つのは、今でも浅草にあるのですか？」「いや。その後『かんさん』の奥さんが絶望して、隅田川に飛び込んでしまった。そんなこんなで店はうまくいかず、一家離散をしてしまいました」

「じゃ、人手に渡つた？」

「ええ。『かんさん』は、ひどく石本さんのことを恨んでいると思いますよ」

「今でも？」

「そりゃそうですよ」

豆千代が、山本の茶碗にお茶を注いだ。

「ところで、何でそんな昔のことを調べているんですか？」

山本はお茶を一口飲んだ。

「実は、その石本さんが殺されたのです」

「えっ！」

豆千代はびっくりして大声を上げた。

「それは『かんさん』に違いないわ」

「そのようですね」

山本は確実だと思った。

「『かんさん』と石本さんは、直接の面識はなかったのですね」

「ええ、ないと思います」

「あなたは、『かんさん』のことを良くご存じですね？」

「はい」

「今でも会えば分かりますか？」

「ええ、分かると思います」

「『かんさん』の写真はお持ちじゃないですか？」

「ちよつと待って下さい」

古ぼけたアルバムを持って来て、山本に見せた。

「ありました。これです、この人です」

指を差したその人物は、優しい顔をした中々の二枚目であった。その両隣りに芸者が写っていた。

「このニコニコしているのが夢奴で、こっちが私です」

宴の席での写真であった。

「この写真、しばらくお借りしてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

山本は、『かんさん』の面影をどこかで見たような気がした。

## 第八章 過去の交通事故

山本は、早速四十年ほど前に一家離散した石屋を探した。まず、先日聞いてある、年寄りの居る石屋に出掛けた。

「先日はどうも」

山本と木村の両刑事は、何軒目かの石屋に入って行った。昔からやっているその石屋の主人は当時のことをうる覚えながら話してくれた。

「確か、倉田石材店って言ったな」

「倉田石材店ですね。そこに若ダンナが居たと思うのですが？」

「ああ、息子が居た」

山本が、ポケットから一枚の写真を出して見せた。

「この人物ですか？」

「ええ、確かに。息子です。この息子が道楽をしまして、大変なことになったんだ」

その主人は顔を曇らせた。

「この息子の名前を、覚えていますか？」

「確か、貫郎と言ったと思うが」

「倉田、貫郎ですね？」

「そうです」

当時の様子を伺い二人は店を出た。

名前が分かった。二人は色めきたった。

「倉田貫郎。どこかで聞いたことのある名前ですね」

「そうなんだ。さつきから考えてるんだが思い出せない。取り敢えず君は署に帰ってこのことを報告してくれ。そして、あの写真の現在の復元した顔を見ておいてくれ」

山本は台東区役所に行き、倉田貫郎を調べた。そこで山本は意外な事実を掴んだ。倉田の住所は、一家離散した場所にずっと一人だけ置いてあり、僅か二年前に転出している。その転出先は、大里郡寄居町と書かれていた。

「なにっ、寄居町」

手帳に書いてある石本良一の住所と比べた。一番違いである。

山本は、あっ！ と思った。

「そつだ。あの老人だ」

思わず声を出してしまった。どこかで聞いたことのある名前だと思っていたが、害者の隣に住んでいる老人であった。これで謎が解けた。だれも沼からなんか来なかったのだ。もちろん、私道の入口からも。隣の住人がいとも簡単に出入りしている。それは日課になっている暮をやるためにだ。第一発見者である倉田が犯人だったなんて。

(何てことだ)

山本は舌打ちした。しかし、なぜ倉田は石本の隣に越したのか？住民台帳には二年前に転出されている。

山本は署に連絡を入れた。

「山本です」

「あつ、先輩」

木村が出た。

「コンピューターの方はどうだった？」

『かんさん』の若いころの写真から、現在の顔をコンピューターを使って復元をした。

「ええ、どこかで見たことのある顔なんです。先輩も見てるかも知れませんが」

「ああ。何回も見てるよ」

「えっ？ どこですか？」

木村がびつくりした。

「実はな、『かんさん』の本名倉田貫郎は、害者の隣に住んでいる老人だ」

「あの老人が？」

木村は、またびつくりした。

「そうだ。二年前に浅草から寄居に住所が移っている。そこで、寄居の役場に行つて倉田貫郎の住民台帳を調べて来てくれ」

「はい、分かりました」

「それと、倉田から預かったタオルを徹底的に指紋採取するよう伝えてくれ」

「はい、伝えておきます」

山本は、区役所を出て足早で駅に向かった。

あの老人、何食わぬ顔で第一発見者になりすまし堂々としていたが、絶対にバレないと思っているのかな。それともバレたらバレたでいいと開き直るかな。なんせ自分を陥れた奴をやつとやつつけることができたのだからな。

帰りの電車で、山本は色々な考えを巡らした。

木村の報告を聞いた課長は、山本が署に着くなり緊急会議を始めた。

「これで動機のある人物が浮かんで来たわけだが」

「これだけの動機があれば充分だと思います」

課長の言葉が終わらない内に、山本が切り出した。

「ちよつと待て。まだ何も掴めてないのだぞ。何の証拠もない。ここにあの時の調書がある。第一発見者としてのな」

課長は調書をめくり、倉田の供述したところを読み上げた。

「四月三日午前八時頃、隣の石本さんがいつもと違うので不審に思い声を掛けてみた。玄関の取っ手を回したが鍵が掛かっていたので裏庭に回り縁側を覗いてみた。雨戸は開いていて中を覗くことができた。奥の間で石本さんが仰向けに倒れているのが見えて、警察に通報した」

山本は倉田の住民票を目で追っていた。確かに、二年前に浅草から転入されている。二年前と言うと、石本の妻の一周忌の頃だ。(何で二年前なんだ？ 害者の石本は三年前に移っている。あそこは建売住宅でいっぺんに建っているわけだ。それなのに一年間、何で待っていたんだ？・・・そうか、あの家には人が住んでいたのか。それでその人が売りに出すまで待っていたんだ。でも売りに出さずにずっと住んでいたら、どうするつもりだったのだろう？これは変だな)

山本はこのことを課長に話した。

「確かに変だな。不動産屋を当たってみてくれ・・・」

会議が終わり、それぞれに特別班が設けられた。山本と木村は、新たな疑問にぶつかって行った。

地元の不動産屋で建てた業者を聞き、新宿と言われ二人は飛んで行った。

その不動産屋はすぐに分かった。寄居署の山本と名乗り、当時のことを話し倉田を担当した人に会った。

「あなたが倉田さんを担当した方ですね？」

「そうです。倉田さんが何か？」

「いや、大したことではないのですが」

いかにも営業マンらしいその人は、奥からファイルを持って来た。

「倉田さんは、二年前に購入しております」

「確か、あそこは三年前に分譲した物件ですよね」

「そうです。三年前に分譲し、すぐに全部売れました。そして、倉田さんの購入した家が売りに出されて、我々が斡旋したものです」

「たまたま売りに出たのですね？」

「それが、おかしいことがあります」

担当者が声をひそめた。

「おかしいこと？」

「ええ、倉田さんはその時が初めてではなく、その一ヶ月前にも見えまして、あの分譲住宅の一角で売り物が出たら教えてくれと言つて来られたのです」

「何、あの一角で売り物が出たら教えてくれと？」

山本が血走った。

「そういう依頼は結構あるのですか？」

「ええ、たまにそういうのはありますが……。あの家は持ち主が急に事故で亡くなりまして、売りたいと地元不動産屋に頼んでしまったのです」

「事故で亡くなった？」

山本が目を剥いた。

「そうです。ご主人が仕事の帰りに、鉢形の駅から県道を渡ろうとした時に車で跳ねられたのです。その車は逃げてしまつて分からないのですが」

「そう言えばそんな事件があつたな」

山本が記憶を辿った。

「こっちはそんなことは何も知らないのに倉田さんがまたやって来て、売りに出てるわけだから購入したいと言つのです」

「地元の不動産屋で止まってしまった」

「そうなんです。我々が分譲した物件ですが、売る時には我々の所に来るとは限りません」

「それで？」

「それで地元の業者に聞いてみたら、もう次の客がついていたのです」

「早いな」

「当時は安かったですからね」

「それから？」

「それからが大変です。どうしてもほしいので、その買った人に賠償金を払うから買い戻してくれと言つのです」

「どうしてもほしいと？」

「そうです。そしてその業者に事情を説明して、かなりの賠償金を払い手に入れたのです」

「そんなに貴重な物件ですか？」

「いや、そんなことはないですけど。あの時、皆も言ってたんですが、昔あの土地に小判でも隠したんじゃないかと。それで前の持ち主を殺したのは倉田さんじゃないかと噂してたのです」

「そうですか。そんなことがあったのですか」

山本は丁重に挨拶して、不動産屋を出た。

早速、署にこのことを連絡して、二年前の事故を再度調べるよう伝えた。

この事故の犯人が倉田である可能性が高い。交通事故で犯人の見当がついていれば物証を掴むのは簡単である。その物証を掴みさえすれば、二つの事件が一気に解決する。

倉田貫郎は夫婦二人暮らしである。娘が一人いるが、婿を貰わず遠に嫁に行っており、たまに子供を連れて遊びに来ている。浅草にも自分の家があり、必要以上に寄居に家を買つ必要は全くないのである。浅草の家は人に貸しているが、年金暮らしで新たに家を買ってギリギリの生活をする必要はない。

これだけ状況証拠が揃っているのに、物証がないため後一步が出せないのである。

山本と木村は、倉田がひき逃げ犯と仮定して当時倉田が乗っていた車を探した。当時の管轄区域の派出所、車検場を調べ、倉田の乗っていた車とその車が現在どこにあるかを突き止めた。

その車は山梨の小さな町で登録されていた。事故の時、道路に落ちていたヘッドライトの破片などから鑑識が発表した車種と同じであった。

確信を持った山本は、山梨へ飛んで車の持ち主に会い、取得ルートを聞いた。街道沿いの中古車センターで格安の車が並んでいたので購入したと言い、その中古車センターで当時のいきさつを聞いた。「良く覚えています。朝、店を開けたと同時に入って来まして、この車を買ってくれと言ったのです」

「いきなり？」

「そうです。じゃ、査定しましょうということになって車を見たら、前がぶつかっているんです。どうしたのですかと尋ねたら、昨夜友人の家から帰る途中酔っ払ったもので木にぶつけたと言ったのです」

「木に？」

「ええ、木にはちよつと不自然だったけど」

「それで？」

「それで酔ってたもので近くのモーターに泊まり、縁起が悪いので売りたいと言って。こういうケースは盗難車が多いんです」

「盗難車？」

「ええ、まして事故車ですからね。それで車検証と免許証を見せてもらいまして、本人の物が確認をしました」

「盗難車ではなかった？」

「ええ、本人の車でした。それで、ぶつかっているので修理費用などを引くとかかなり安くなると言ったら、それでいいからと言つのです。ただ、今すぐお金は渡せないの、後から書類にハンコを押して印鑑証明書を送ってくれと頼みました」

「なるほど」

「それが着いたらお金を振り込むからということ、納得してもらいました」

「そうすると、その車はここに置いて帰ったわけですね」

「そうです」

「その人はこの男ですか？」

山本が倉田の写真を見せた。

「はい、この人です。間違いありません。あっそうそう、後で何かあったら面倒なので、その時の免許証をコピーしてあります。それに修理前の写真があると思います。ちょっと待って下さい」

倉田貫郎と書かれた免許証のコピーと破損している車の写真を預かり、山本は特急あずさ78号に乗って東京へ向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0193j/>

---

影なき殺人事件

2011年1月13日03時25分発行